

(2) 「課題解決に向けた計画に関するもの」と学習指導要領各教科等の目標との関連

【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「2 課題解決に向けた計画に関するもの」の「課題解決」については、「これら（基礎的・基本的な知識及び技能）を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに・・・」と学習指導要領等に表記されているように、すべての教科に関連するものである。まず「課題」という表記を確認し、特に関連の大きい教科として、職業科（中学部段階の職業・家庭科の職業分野）と家庭科（中学部段階の職業・家庭科の家庭分野）を取り上げた。

職業科 (職業分野)	中学部		高等部	
	将来の家庭生活や職業生活に必要な事柄を見いだして課題を設定し、 <u>解決策を考え、実践を評価・改善し、自分の考えを表現する等して、課題を解決する力</u>		将来の職業生活を見据え、 <u>必要な事柄を見いだして課題を設定し、解決策を考え、実践を評価・改善し、表現する力</u>	
	1 段階	2 段階	1 段階	2 段階
	将来の職業生活に必要な事柄について <u>触れ、課題や解決策に気付き、実践し、学習したことを伝える等、課題を解決する力の基礎を養う。</u>	将来の職業生活に必要な事柄を見いだして <u>課題を設定し、解決策を考え、実践し、学習したことを振り返り、考えたことを表現する等、課題を解決する力を養う。</u>	将来の職業生活を見据え、 <u>必要な事柄を見いだして課題を設定し、解決策を考え、実践を評価し、表現する力を養う。</u>	
家庭科 (家庭分野)	中学部		高等部	
	将来の家庭生活や職業生活に必要な事柄を見いだして課題を設定し、 <u>解決策を考え、実践を評価・改善し、自分の考えを表現する等して、課題を解決する力</u>		家庭や地域における生活の中から <u>問題を見いだして課題を設定し、解決策を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現する等、課題を解決する力</u>	
	1 段階	2 段階	1 段階	2 段階
	家庭生活に必要な事柄について <u>触れ、課題や解決策に気付き、実践し、学習したことを伝える等、日常生活において課題を解決する力の基礎を養う。</u>	家庭生活に必要な事柄について <u>考え、課題を設定し、解決策を考え、実践し、学習したことを振り返り、考えたことを表現する等、日常生活において課題を解決する力を養う。</u>	家庭や地域における生活の中から <u>問題を見いだして課題を設定し、解決策を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現する等、課題を解決する力を養う。</u>	

職業科（職業分野）と家庭科（家庭分野）では、まず「課題を設定する」ことが重視されていることに着目した。中学部 1 段階では「課題に気付き」、それ以降の段階では「課題を設定し」と表記されている。本研究では課題とは、改善すべき生活上の問題点に加え、よりよく職業生活や家庭生活を送るために取り組むべき主題（テーマ）でもあると捉えている。よって、よりよく生活するという思いの下に、自分の身の回りの様々な事象を捉える中で、必要な情報を取捨選択し、課題を自分事として設定することが求められていると解釈した。小学部生活科の目標の「身の回りの事象と自分との関わりについて関心をもったり理解したりする力」を土台として、そこから発展させた力である。「2 課題解決に向けた計画に関するもの」のうち「⑦自分で課題を見つけて、取り組むべきことを考えたり決めたりする力」との関連が大きいことが分かった。

課題を設定した後は、課題の解決策を講じていかなければならない。中学部1段階では「解決策に気付き」、中学部2段階以降では「解決策を考え」と表記されている。中学部1段階では、自分だけで課題を設定したり、解決策を講じたりすることまでは求められておらず、実際の授業においては、教師側からの提示になる場合も多いと考えられる。しかし、中学部2段階以降は生徒が主体となって「課題設定→課題解決に向けた計画→実践→評価（振り返り）→解決策の改善」のPDCAサイクルに沿って学習を進めていくことが求められている。中学部1段階においても、教師と一緒に丁寧にPDCAの手順を踏み、課題を自分事として捉えることや解決に向けて計画することの重要性を実感できるようにしていくことが重要であると考えた。

このことは意識調査におけるグループ協議の中でも「児童生徒が混乱しないようにと、教師主導で課題やテーマ、解決方法も決めてしまっている授業が多いのではないだろうか。そのような授業の中では、児童生徒は活動の意味を十分実感できないまま、教師の指示に従って行動しているだけになっているのではないか」という意見が上がり、検討が深められた。以上のことは、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「2 課題解決に向けた計画」に関するもののうち「⑧もっている知識や技能を他の学習や場面でも使う力」「⑨課題解決に向けて計画する力」「⑩優先順位をつける等条件に応じて計画する力」との関連が大きいと考える。

本校の「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題の整理の検討の中で、児童生徒が解決に向けて自ら計画・実践する姿を想定した時、実践と計画を細かく繰り返しながら、状況に応じて変更を受け入れながら課題解決に向かう力の育成も重要であるとの意見が出された。そこから「⑪遂行途中でも状況に合わせて計画を変更したり、立て直したりする力」「⑫試行錯誤しながら解決に取り組む力」が【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の1つとして挙げられた。「⑪遂行途中でも状況に合わせて計画を変更したり、立て直したりする力」は、解決に向けての見通しをもち計画に沿って実践している途中でも、外的な要因で変更が必要となった場合に応じることができる力である。変更に応じられるだけでなく、解決のゴールを見失うことなく、再度計画を練り直すことが求められる。計画を練り直すためには、「課題解決に向けて、今、どこまで進捗しているか」という、客観的な自分の活動の振り返りや評価が必要となる。「⑫試行錯誤しながら解決に取り組む力」は解決に向けて計画的に進めているものの、その方法だけに限らずよりよい方法を見出しながら、解決に努める姿である。また、解決に向けて具体的に計画する力はまだ弱いものの、ゴールや解決の方向性を見失わずに、様々な方法で取り組もうとする姿であるとも言える。こちらもその都度自分の活動を振り返り、評価・改善する力が必要である。そのため、「2 課題解決に向けた計画に関するもの」として「⑬自分の活動や学習を振り返り、評価する力」も重要であると検討された。教科で見ると職業科や家庭科の目標には、中学部2段階に「学習したことを振り返り」、高等部1、2段階に「実践を評価・改善し」との表記があり、関連が大きいと考えられた。

次に、理科の目標について確認した。中学部の「疑問をもつ力」の表記は、「課題を設定する」と同義と捉えることとした。また、中学部2段階の「予想や仮説を立てる力」や、高等部1段階の「予想や仮説を基に、解決の方法を考える力」の表記は、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「2 課題解決に向けた計画に関するもの」の「⑨課題解決に向けて計画する力」との関連が大きいと考えた。

理科	中学部		高等部	
	観察、実験等を行い、 <u>疑問をもつ力と予想や仮説を立てる力</u> を養う。		観察、実験等を行い、 <u>解決の方法を考える力</u> とより <u>妥当な考えをつくりだす力</u> を養う。	
	1段階	2段階	1段階	2段階
	主に差異点や共通点に気づき、 <u>疑問をもつ力</u> を養う。	<u>疑問をもったこと</u> について既習の内容や生活経験を基に <u>予想する力</u> を養う。	主に <u>予想や仮説を基に、解決の方法を考える力</u> を養う。	主にそれらの働きや関わり・変化や関係・性質、規則性及び働きについて、より <u>妥当な考えをつくりだす力</u> を養う。

しかし、「〇〇をしたら、〇〇となるだろう」「時間が経つと、〇〇と変化するだろう」という予想や仮説を立てる力は、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「1 周囲の事象の捉えに関するもの」の「④ちょっと先の事象を想像したり、行動の結果を予測したりする力」とも関連が大きい。(1)でも述べたが、「結果をイメージした上で事象の変化に着目したり、自分が対象に何らかの働き掛けをした上で状況の変化を捉えて結果を認識したりする」ような経験を積むことにより、同様の状況になった際に予め結果を想起することができるようになる。また、状況が少し違っても似た状況を複数重ね合わせながら、結果を予想するようになると考えられる。このような予測や仮説を基として「だから、〇〇してみよう」と課題解決に向けて何をしていくか計画を立てることができると思われる。そして、予想や仮説と異なった結果になったときに、「なぜだろうか」「状況や条件に何か違いがあったらどうか」と、より深く出来事や状況の理由や背景について考えることにつながる。これは、「1 周囲の事象の捉えに関するもの」の「出来事の行動の理由や背景を説明する力」ともつながる。「1 周囲の事象の捉えに関する力」を土台として、「2 課題解決に向けた計画に関する力」が育成されていくという思考の育ちの道筋もあるのではないかと考えた。

本研究では【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】を「1 周囲の事象の捉えに関するもの」と「2 課題解決に向けた計画に関するもの」に分けて考えているが、以上のような両者の結びつきの強さにも気付くこととなった。

図画工作科・美術科の目標には、「課題」や「解決」という表記はない。しかし、表したいことを思い付き、それに向けて表し方を考えたり、構想したりすることは、課題の設定と、その解決に向けた計画と同様のプロセスではないかと話し合い、図画工作科・美術科の目標を確認した。

図画工作科・美術科	小学部			中学部		高等部	
	造形的なよさや美しさ、表したいことや表し方等について考え、発想や構想をしたり、			造形的なよさや面白さ、美しさ、表したいことや表し方等について考え、経験したことや材料等を基に、発想し構想するとともに、		造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫等について考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、	
	1段階	2段階	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階
	表したいことを思い付いたり、	造形的なよさや美しさ、表したいことや表し方等について考え、発想や構想をしたり、	造形的なよさや面白さ、表したいことや表し方等について考え、経験したことや思ったこと、材料等を基に、発想し構想するとともに、	造形的なよさや面白さ、美しさ、表したいことや表し方等について考え、経験したことや想像したこと、材料等を基に、発想し構想するとともに、	造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫等について考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、	造形的なよさや美しさ、表現の意図と創造的な工夫等について考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、	

図画工作科・美術科は、他の教科以上に実際の授業においては「⑩試行錯誤しながら解決に取り組む力」を発揮して活動することが想定される。表し方を考えて、考えたことの再現として表現するばかりではなく、表しながら考えたり思い付いたりし、その表し方を続けたり変化させたりする等、造形に係る様々な思考とその結果としての表現が現れると考えられる。児童生徒がどのように感じたり考えたりしながら表現しているかについては、完成作品だけでなく、制作物の途中段階や制作中の児童生徒の表情やつぶやきを、丁寧に見取る必要があると考えた。

なお、例えば、空を絵の具で描く中で、にじみの美しさを追究したくなった場合は、「空を思うように描く」という主題を「絵の具でにじませながら描く」という方法で解決に向け取り組んでいたが、「にじみ」という解決方法が、「きれいなにじませ方をしたい」という造形に係る目的や取り組むべき主題そのものに変化するという状況が度々現れる。「きれいな色のにじみを表すにはどうしたらよいか」という課題に対し、水の調整や色の重ね方を工夫するという解決方法を考え実践し、一筆一筆評価しながら、次の方法を考えるというように、らせん状に学習が進んでいると考えられた。

図画工作科・美術科と同様の芸術に関する教科として、音楽の「思考力、判断力、表現力等」の目標を確認した。音楽においても、自分が表したいテーマについて考えたり、歌唱や器楽や身体表現表し方を工夫したりしていく学習は、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「2 課題解決に向けた計画に関するもの」につながるが、このことについては、音楽の目標ではなく内容として記載されている。

音楽科の目標には「楽しさやよさや美しさを味わって聴くことができる」と記載されており、「1 周囲の事象の捉えに関するもの」の「①周囲の物事や変化に気付く力」との関連が大きいとも考えられた。さらに、気付いて捉えた音や音楽について、「興味・関心を向け」「楽しい」「美しい」と感じ、「楽しいもの」「美しいもの」「いいもの」と価値付けることは、【「思考力、判断力、表現力」を支える学びに向かう力】の「周囲の事物や人に関心を向けようとする力」や「興味・関心を深めたり広げたりしようとする力」につながるものである。

と考えられた。

音楽科	小学部			中学部		高等部	
	感じたことを表現することや、曲や演奏の楽しさを見いだしながら、音や音楽の楽しさを味わって聴くことができるようにする。			音楽表現を考えたことや、曲や演奏のよさ等を見いだしながら、音や音楽を味わって聴くことができるようにする。		音楽表現を創意工夫することや、音楽を自分なりに評価しながらよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。	
	1段階	2段階	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階
音楽的な表現を楽しむことや、音や音楽に気付きながら関心や興味をもって聴くことができるようにする。	音楽表現を工夫することや、表現することを通じて、音や音楽に興味をもって聴くことができるようにする。	音楽表現に対する思いをもつことや、曲や演奏の楽しさを見いだしながら音楽を味わって聴くことができるようにする。	音楽表現を考えて表したい思いや意図をもつことや、音や音楽を味わいながら聴くことができるようにする。	音楽表現を考えて表したい思いや意図をもつことや、曲や演奏のよさを見いだしながら、音や音楽を味わって聴くことができるようにする。	音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさを自分なりに見いだしながら音楽を味わって聴くことができるようにする。	音楽表現を創意工夫することや、音楽を自分なりに評価しながらよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。	

体育科及び保健体育科の「思考力、判断力、表現力等」の目標にも「課題の発見」「課題の解決」の表記がある。

体育・保健体育科	小学部			中学部		高等部	
	遊びや基本的な運動及び健康についての自分の課題に気付き、その解決に向けて自ら考え行動し、他者に伝える力を養う。			各種の運動や健康・安全についての自分の課題を見付け、その解決に向けて自ら思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。		各種の運動や健康・安全についての自他や社会の課題を発見し、その解決に向けて仲間と思考し判断するとともに、目的や状況に応じて他者に伝える力を養う。	
	1段階	2段階	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階
体を動かすことの楽しさや心地よさを表現できるとともに、健康な生活を営むために必要な事柄について教師に伝えることができるようにする。	基本的な運動に慣れ、その楽しさや感じたことを表現できるとともに、健康な生活に向け、感じたことを他者に伝える力を養う。	基本的な運動の楽しみ方や健康な生活の仕方について工夫するとともに、考えたことや気付いたこと等を他者に伝える力を養う。	各種の運動や健康な生活における自分の課題を見付け、その解決のための活動を考えたり、工夫したりしたことを他者に伝える力を養う。	各種の運動や健康な生活における自分やグループの課題を見付け、その解決のために友達と考えたり、工夫したりしたことを他者に伝える力を養う。	各種の運動や健康・安全な生活を営むための自他の課題を発見し、その解決のための方策を工夫したり、仲間と考えたりしたことを、他者に伝える力を養う。	各種の運動や健康・安全な生活を営むための自他の課題を発見し、よりよい解決のために仲間と思考し判断したことを、目的や状況に応じて他者に伝える力を養う。	

課題の発見や設定については、小学部段階では「自分の課題に気付き」と表記されているが、中学部2段階では「自分やグループの課題を見付け」、高等部では「自他の課題を発見し」と表記されている。また、課題の解決に向けては、小学部では「その解決に向けて自ら

考えて行動し」とあるが、中学部2段階では「解決のために友達と考えたり、工夫したり」、高等部では「仲間と考えたり」「仲間と思考し判断し」と表記されている。自分の課題からグループや他者との課題へと、自分で解決に取り組むところから、友達や仲間と考え、工夫し、判断することへと展開していることが分かる。健康や安全な生活は、個人だけでなく、生活集団やより広い公衆の課題であるということや、生涯学習の一分野としてスポーツに親しむ生活を想定し、仲間と協力し合う姿を目指すという体育科・保健体育科としての教科の特性と言える。

しかし、他者と一緒に課題の解決に向けて計画し実践する力の育成は、体育科に限らず学校教育全般における重要な使命である。特別支援教育においては、より丁寧な教育計画と支援のもとに育成を目指していかなくてはならない。その意味では、【「思考力、判断力、表現力」を支える学びに向かう力】の「周囲の人と関わり、他者と気持ちを通じ合わせようとする力」や「自分の思いや考えを調節しながら友達と協力して解決に取り組む力」とも関連が大きいと考えた。

(3) 「コミュニケーションに関するもの」と学習指導要領各教科等の目標との関連

【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「3 コミュニケーションに関するもの」は、「どの教科においても、「感じたことを伝える」「考えたことを表現する」等の表記がある。そのため、「⑭伝えたいことを発信する力」とは、どの教科とも関連が大きいと言える。その他の⑮から⑰までの「3 コミュニケーションに関するもの」は、一方的な発信や表現では成立しない、相手からの応答や対応を予測し期待しての発信であり、自分と相手とのやりとりが成立するもの、つまり「伝え合う」ことを前提としていると考えた。国語科の「思考力、判断力、表現力等」の目標は、「伝える、表現する」ではなく「伝え合う」と表記されており、双方向のコミュニケーションを意味していることが分かる。国語科では「言葉」を介在することが前提だが、「伝え合う」ことに着目すると【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「3 コミュニケーションに関するもの」の「⑰様々な方法でコミュニケーションをとる力」と関連が大きいと考えた。

国語科	小学部			中学部		高等部	
	日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思考力や想像力を養う。						
	1段階	2段階	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階
	日常生活における人との関わりの中で伝え合い、自分の思いをもつことができるようにする。	日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思い付いたり考えたりすることができるようにする。		日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもつことができるようにする。	日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする。	社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする。	社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げることができるようにする。

また、国語科の目標のうち伝え合う対象に着目すると、小学部においては「日常生活における人との関わりの中で」、中学部では「日常生活や社会生活における人との関わりの中で」、高等部では「社会生活における人との関わりの中で」と表記されており、段階に応じてやりとりを行う対象が広がっていることが分かった。自分と様々な関係にある人に自分の思いを伝え、関わり合うということは、相手に応じた言葉の選択やコミュニケーションの方法が求められる場合があり、その意味では「⑩様々な方法でコミュニケーションをとる力」との関連が大きいと考えた。

「⑩依頼の場面等で困っていることや必要な支援について説明する力」については、児童生徒が安心して生活していくために必須となる力として、「⑪自分から相談する力」と合わせて、意識調査グループの中でも特に検討が深められた。児童生徒が必要とする要求や依頼が正しく相手に伝わり、相手に受け止めてもらうためには、まず、自分が要求したいことや依頼したいことを児童生徒自身で把握していることが重要である。さらに、その理由や必要性を相手に受け止めることができるように伝える必要も出てくる。これは、「1 周囲の事象の捉えに関するもの」の「⑤出来事や行動の理由や背景を説明する力」とつながると考えた。つまり、「⑤出来事や行動の理由や背景を説明する力」は、出来事や行動の理由や背景を捉える力として「1 周囲の事象の捉えに関するもの」に含まれるものだが、出来事や行動の理由や背景を相手に伝わるように説明する力としては「3 コミュニケーションに関するもの」に属するものであるとも捉えられた。

複雑な要求や依頼や自分の思い等を適切に伝えるには、「どのように伝えるか」という思考や判断が必要となる。特に、その場で目に見えるものとは限らない出来事や行動の理由や背景や心情は、シンボルや言葉や文を複数用いて組み立てて発信する必要が出てくると考える。「国語科」の小学部1段階の「出来事の順序を思い出す力や感じたり想像したりする力」中学部1段階の「順序立てて考える力や感じたり想像したりする力」中学部2段階以降の「筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力」と関連が大きいと考えた。

国語科	小学部	中学部		高等部	
	日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思考力や想像力を養う。	日常生活や社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。		社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う	
	3段階	1段階	2段階	1段階	2段階
	<u>出来事の順序を思い出す力や感じたり想像したりする力</u>	<u>順序立てて考える力や感じたり想像したりする力</u>	<u>筋道を立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力</u>		

この「出来事の順序を思い出す力」「順序立てて考える力」「筋道を立てて考える力」は、他者に分かりやすく伝えるためだけでなく、児童生徒や自分が経験して捉えた一連の出来事を深く理解するために必要な力であり、また、自分で直接経験したことではない事項についても、見たり聞いたり読んだりして理解していくためにも必要な力であると考えた。さらに、

国語科の目標を見ると、理解したことを踏まえて「感じたり想像したりする力」の育成が求められていることが分かった。これは、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の「1 事象の捉えに関するもの」の「相手の伝えようとすることや言葉・文章や記号等が意味することを受け止め、対応しようとする力」と関連させながら、「3 コミュニケーションに関するもの」の「⑩自分の考えと他者の考えを見比べる力」にもつながるものであると考えた。

(4) 関連の考察のまとめ

本研究では、本校職員の意識調査の回答を基に、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】と【「思考力、判断力、表現力」を支える学びに向かう力】を整理し、さらに【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】を、「1 事象の捉えに関すること」「2 課題解決に向けた計画に関するもの」「3 コミュニケーションに関するもの」の3つの視点で整理した。次に、この【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】を中心に、特別支援学校知的障害各教科等の「思考力、判断力、表現力」の目標との関連の分析を行ったところ、本校職員が考える【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】と、各教科の目標の関連は大きいと考えるに至った。しかし、今回の分析では【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】で挙げたそれぞれの力を1つから3つ程度の教科の目標との分析を行ったが、そのような教科の取り上げ方では不十分だったと考える。

今回、部分的な分析であったものの、1つの【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】は複数の教科と関連するということが分かった。このことから【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】は各教科の枠を超えた複合的な力であると言える。実際、児童生徒が現在及び将来の生活の場面において様々な課題に直面した際は、私たちがそうであるように、単一の教科で身に付けた「思考力、判断力、表現力等」だけで解決できることは、ほとんどないと思われる。よりよく生活していくために、生かせる事柄を想起し、様々な考えたり判断したり表現したりする等、力を複合的に発揮して解決に向けて取り組もうとすると予測される。実生活で生きる【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】を育むためにも、教科横断的な視点が重要であることが分かった。つまり、授業や単元内にとどまらず他の場面でもその力が発揮できるように般化され、普段は意識しておらずとも必要に応じて想起できるように潜在化され、複数の教科等の知識や技能や見方や考え方が総合化されることが重要であると考えた。

さらに、「2 課題解決に向けた計画に関するもの」や「3 コミュニケーションに関するもの」との関連の大きい各教科の「思考力、判断力、表現力等」について考察を進めると、「1 事象の捉えに関するもの」との関連が見えてくる等、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の3つの視点についても、それぞれ独立したものではなく、お互いが深く関わり合いながら成立していることが分かった。また、【「思考力、判断力、表現力」を支える学びに向かう力】との関連についても考えなければならないことも分かった。

また、本取組では自立活動との関連については検討することができなかったことが、課題とし

て残った。「3 コミュニケーションに関するもの」は、キーワードとして「コミュニケーション」が挙げられ、自立活動のコミュニケーションとの関連の分析が必要だった。また、「1 周囲の事象の捉えに関するもの」も自立活動の環境の把握との関連の大きさが予測された。

今回、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】と、各教科の「思考力、判断力、表現力等」の目標との関連について考察したことは、今後の授業作りに生かしていかなければならない。まず、教科別の指導における「思考力、判断力、表現力等」の目標設定については、児童生徒の生活を切り拓く力につながる【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】との関連が図られなければならないと考える。言い換えると、その目標が達成され、各教科の「思考力、判断力、表現力等」が育成されることが、児童生徒の現在及び将来の生活にどのようなよい影響を与えるのかを考えた上で、目標設定をしなければならないということである。また、活動内容としては、児童生徒が身に付けた力を実生活の中で生かすことができるように、生活の文脈において主体的に活動できるようなものにしていくことも重要となると考えた。

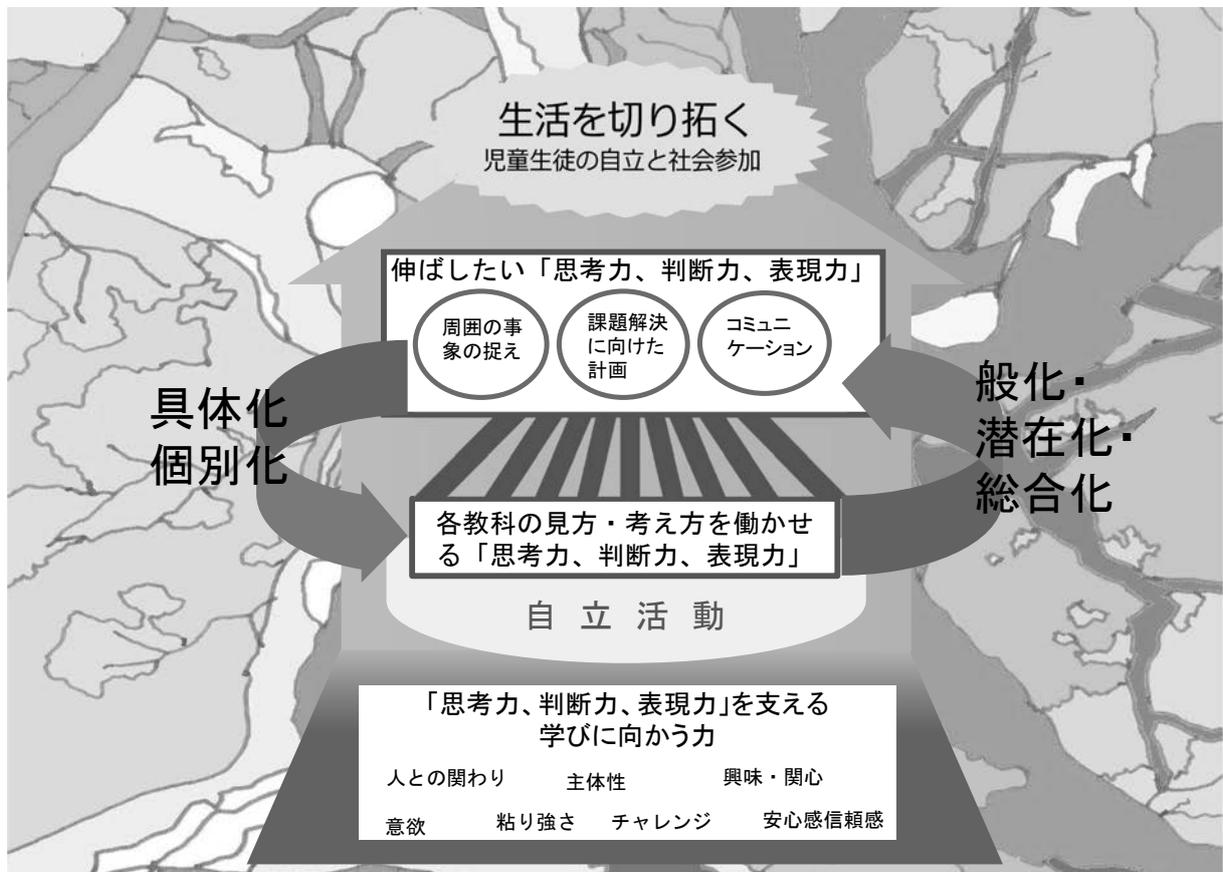
各教科等を合わせた指導は、教科の枠を超えて生活の中からテーマを設定し、児童生徒が主体的に活動することをねらった指導形態であり、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】の育成を図る有効な指導形態であると考えられる。特別支援教育においては、「各教科のどの内容を取り扱ったか」もだが、「児童生徒一人一人がどんな資質・能力を身に付けることができたか」が重視される。単元を計画するにあたっては、単元の個人目標を設定し、3 観点に沿った評価を行っている。【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】は学校生活全体を通して、卒業を見据えて長期的なスパンで育成されるものであるが、それぞれの単元においては、具体的にはどのような力を育むことであるのかを考えていかなければならない。その単元で育成したい「思考力、判断力、表現力等」及び、一人一人の児童生徒につけたい「思考力、判断力、表現力」を考える際に、各教科の「思考力、判断力、表現力等」の目標を、具体的な目標や評価規準の指標としていくことで、着実な力の育成を図ることができると考えた。

以上のことを、P27 の図 11 [「思考力、判断力、表現力」に着目した児童生徒に育成したい資質・能力の整理図] に入れ込んで『思考力、判断力、表現力』の目標の関連図』として再図式化した (図 12)。

【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】と各教科の目標として挙げられている「思考力、判断力、表現力等」が複雑に関連しあっていることを、複数の線でつなぐことで表した。検討が不十分だが自立活動との関連も大きいことが予測されており、実際の授業においては、各教科の目標達成を下支えするものでもあるとして図式化した。

「各教科の見方・考え方を働かせる『思考力、判断力、表現力等』」は、【伸ばしたい「思考力、判断力、表現力」】をその単元で達成する目標に具体化し、児童生徒一人一人の目標に個別化するものとして「具体化・個別化」の矢印として表した。それは、視点を返すと、各授業や各単元で身に付けた「各教科の見方・考え方を働かせる『思考力、判断力、表現力等』」が般化され総合化され潜在化されて、生活を切り拓く力につながる【伸ばしたい

「思考力、判断力、表現力」となることである。そこで、「般化・潜在化（丹野 2022 発達障害研究第 44 巻第 3 号）・総合化」の矢印として表した。



[図12 「思考力、判断力、表現力」の目標の関連図]

